



付 3 7 話 中国上海に行く No.1

今回は付録の付録で、コンピュータソフトの講義を行うため、中国上海の同済大学に行った話をする。T 大学の K 先生の推薦で、同済大学に出かけ、コンピュータの話をするようになった。如何なる経緯でそのようになったか定かではない。当時、同済大学の助手をしていた中国人の先生(名前を失念)がおり、その方の世話で派遣されるようになったと思う。例によって面倒なことはしたくないという思いと、一度は中国を生で見てみたいという思いがあり、複雑であったと記憶している。何度か同済大学の Zang 教授と手紙でやり取りし、招聘状を受ける。今回は、リスクを避けるために旅行会社に全てを任し、ホテルも事前に予約した。予定表を教授と助手に送り、万全を期す。

派遣先の同済大学は 1907 年創立、ドイツ人が上海に開いた同済独文医学・工学堂を前身とし、現在では工学、理学、医学、経済学、哲学、文学、法学、教育学、芸術学など 10 学部を有している。中国でもっとも早く創設された国立大学 7 校の一つで、100 年以上の歴史を誇る。大学で力を入れている研究分野として、都市交通システムや耐震防災技術、都市水環境処理、新エネルギー自動車の開発などが知られている。特に建築学領域では世界的に有名な大学で、学内には設計センターを有し、実務設計も行う。国際化にも積極的に取り組んでおり、ヨーロッパ各国、アメリカ、日本、韓国などの様々な機関と提携を結び、100 以上の国々から多くの留学生を受け入れている。逆に、中国人の海外留学希望者も多数在籍する。特に同済大学はドイツへの留学窓口で、全国からやってきた学生は一旦ここに在籍し、語学を学んだ後、渡航する。

住宅プレハブメーカー大手の S 社に、同済大学の助手である Kn 先生が研修で来ていた。早速紹介してもらい、大学の情報を得る。当時は日本が高度成長期で、中国は低迷。両者の平均月収は 10 倍以上開きがある。そこで聞いた話では、日本で半年講義を行い、給与を得る。後の半年は中国で優雅に暮らすのが理想といていた。彼女も帰国する際は、電気炊飯器を筆頭に多くの電化製品を持って帰ったという。現在では、中国が発展し、特に大都市ではとても無理な話である。このまま、日本が低迷すれば、そのうち逆の話になるかもしれない。

準備が整い、一路上海に飛ぶ。上海空港到着、入国審査を受けた後、到着ロビーで迎えを待つ。確かに到着時間を知らせたはずだが、1 時間近く待っても誰も現れない。「ウー、今回もトラブルか。これは困った」。

仕方がないので、同済大学までタクシーで行くことにした。何とか話が通じ、同済大学へ出発。途中でガソリンを給油、かなり走って大学に到着。運転手に指示され、向かった先が留学生入学受付センター。夏休みが終わり、新規学年が始まる。新規留学生でゴった返していた。フロントで事情を話したが、留学生と勘違いされ、意思が通じず、長いやり取りの末、漸く理解。Zang 教授に電話を入れると、直ぐに飛んできて謝罪した。どうやら、迎えを頼まれた助手が忘れてらしい。初対面ではあるが、直ぐに打ち解け、宿泊施設のある受付センターに同行。既に、手続きは完了しており、受付を済ますと宿泊施設に向かう。

同済大学のキャンパスは広大で、内部に中国式の建物や庭園が造られ、緑豊かな勉学に適した環境である。大通りを挟んで、キャンパスと学生寮や教員の住居がある。これらが森の中に点在し、余りに広大でその範囲が分からない。敷地内の一角に招聘外国教員のための住居として、5階建てのアパートメントがある。昔の日本における文化住宅のようで、階段室を挟んで各階2室の住居が並ぶ。建物は古いが、部屋はトイレ付きで1LDK、リビングはかなり広く快適な生活空間となっている。各階段室の前には、2名の若い女性が常に座っており、コンシェルジュの役割を果たす。毎朝、シーツの取り換えや部屋の掃除もその子たちが行う。キャンパス内を散歩して、特に目立つのが用務員の多さ。庭の掃除から各教育施設の維持管理など、従事者が本当に多い。これは、人口の多さと当時の人件費が極端に安いからだろうと勝手に思った。

翌日、Zang 教授が現れ、講義の打ち合わせを行う。1日3時間、3日程度だったと思う。講義は下手な英語より日本語で行い、通訳を付けることになった。大学内には日本語を教える学科があり、そこに依頼する。内容は、既に手紙で打ち合わせしており、工業化住宅の設計で主にS社用が開発した住宅構造自動設計システムである。当時の中国は発展途上であり、大都市圏は高層建築が立ち並ぶが、一歩都市圏から離れると昔ながらのレンガ造りの住居が多く、近代化が遅れていた。現代的な住居設計・施工法を模索し、確立することが大きな課題となっていた。中国の建設系大学の学科は、アメリカと同様、デザイン系と技術系に分かれており、前者は建築学科、後者は土木学科となる。当然、構造系は土木に属し、技術者養成を目指す。

聴講学生は建築系と土木系が混じり、30名程度であったと思う。熱心にメモを取り、議論し、質問をする。同済大学は、国の重点大学に指定され、学費は全て無料、生活費まで支給されるそうだ。学生全てが、国の将来を担う勢いで勉学にいそしむ。今の日本と大きな違いだ。